

政策1 自然豊かなまちづくり
施策5 海洋・河川環境の保全と再生

海洋・河川は多様な生物の生息空間であり、人々に憩いや潤いを与えてくれます。しかしながら、現在、ごみの不法投棄や環境の変化に伴う水質の悪化等により、海洋・河川環境は必ずしも良好な状態にあるとは言えません。本市では、毎年「浦戸湾・七河川一斉清掃」や「仁淀川一斉清掃」を実施するなどして、水質浄化や市民の環境美化意識の高揚を図っています。今後も、継続して環境美化活動等を実施するとともに、県と連携を図り、より効果的・効率的な海洋・河川環境の保全と再生に取り組めます。

(1) 取組方針

- ・内水面資源の維持・増殖と環境保全活動を促進します。
- ・鏡川の良好な水質や流域の特性に応じた豊かな自然環境の保全を図ります。
- ・河川及び浦戸湾の再生を目指す活動を市民と協働で実施します。

(2) 主な取組（抜粋）

内容	取組状況
鏡川水系でのアユの遡上状況調査	右ページ参照
「新鏡川清流保全実施計画」の策定及び事業の実施	平成29年度に「2017 鏡川清流保全基本計画」を策定し、24の施策と63の取組を掲げ、事業の実施・検討を進めている。
河川及び浦戸湾の再生をめざした市民参加による一斉清掃の実施	毎年、市民参加による「浦戸湾・七河川一斉清掃」や「仁淀川一斉清掃」を実施している。

(3) 数値目標と達成状況

- ◎：目標を上回る成果を挙げている △：目標どおりの成果に至らない見通し
○：ほぼ目標どおりの成果を挙げている ×：目標を大幅に下回る見通し

No.	指標	指標の説明	目標値 (令和4年度)	直近値 (平成30年度)	達成状況
①	アユ生息数	鏡川水系に生息する天然アユと放流アユの生息数	天然遡上： 100万尾	天然：40.8万尾 放流：5.2万尾	△
②	浦戸湾・七河川一斉清掃で集められるごみ量	市民の美化意識の高揚を図り、河川に廃棄されるごみの減少を目指すもの	90 t	67 t	○

(4) 総合評価

評価基準	評価	評価の理由等
A：現在の取組を維持し、施策成果を維持する	○	令和3年度に評価を実施
B：現在の取組を強化し、施策成果を向上させる		
C：現在の取組を見直し、施策成果を向上させる		
D：計画への登載の見直しや、施策の統合・再構築を要する		

天然アユの遡上状況調査について

(1) 天然アユの生息と鏡川清流保全基本計画に基づく調査



遡上中の天然アユ

鏡川に生息・生育する多様な生きものの中で、アユは清流のシンボルとして市民の関心がとりわけ高く、河川生物を代表する魚類である。また、天然アユは川と海（主に浦戸湾）で過ごすため、「森と海とまちをつなぐ環境軸」である当河川の健全性を評価できる好適な指標種といえる。

このような天然アユの保全は清流保全と近いとの考えから、「2017 鏡川清流保全基本計画」においても、天然アユの保護・増殖に向けた施策を計画しており、「鏡川清流保全環境調査」もそのひとつである。

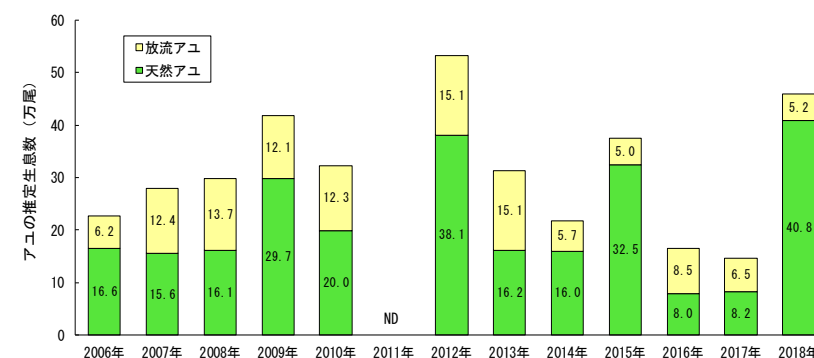
(2) 「鏡川清流保全環境調査」の手法

作業項目	内容
アユ遡上状況調査	潜水目視視察により、アユの遡上状況を把握するとともに、水面面積の補正、放流尾数の聴取、総生育数の推定等を行う。
アユ産卵場調査	アユ産卵場の位置、範囲、面積等を把握する。
報告書作成	作業結果をとりまとめ、分析する。

(3) 「鏡川清流保全環境調査」の結果と見えてきた課題

「2017 鏡川清流保全基本計画」では、天然アユの遡上目標を前計画どおり「100万尾」としつつも、当面10年間においては現実的な値として50万尾と設定している。2018年度の調査における天然アユ遡上数は約41万尾と推定され、これは2006年の調査開始以降、最多であったが、それでも目標値の8割程度である。

さらに、「第二次高知市環境基本計画」の遡上目標「100万尾」の達成となると、近年最多となった遡上数を倍増させる対策が必要となるが、減災・防災等の多面的かつ公益的機能が期待される鏡川において、川の連続性の確保、環境収容力（継続的に生物が存在できる最大量）の増大、アユ産卵場整備等が必要で、多くの利害関係者や関係機関との中長期の調整を要する。また、人為的な対策が及ばない気候変動等の外的要因にも大きく左右されることになる。



近年における放流・天然アユ生息数の推移



朝倉堰の現状(2018年5月)